

夫が急病で倒れてから3年あまり経つ。頑丈を絵に描いたような人だったので、発病当時は短期入院で帰宅できるものと楽観していたが入院中に悪化、脊髄に異常が認められるが病名は特定できず治療法も手探り状態で3か月激痛に苦しんだ。病院で出来ることはすべて終了ということで大変な痛みを抱えたままりハビリ専門病院に移り、5か月後退院。後遺症で神経障害性疼痛と片手足麻痺などが残ってしまった。退院後の介護の仕方はリハビリ病院の担当看護師が丁寧に指導してくれたが、それを退院後はひとりで行うのかと考えると不安というより恐怖だった。退院日が迫ると同時に介護認定を受ける手続きをするのだが年末年始の慌ただしい中、期日までに煩雑な手続きをひとりでこなすのは容易では無かった。そんな時、発病当時からずっと私達を支えてくれた友人夫妻がいる。8年前、ふるさと倶楽部の運営委員が同期だった縁で何かと親身に手助けをしてもらった。現在できる限りの介護サービスを受けられるのも、有能なケアマネジャーに結び付けてくれたその友人のおかげだと思う。また、荒れた庭の手入れや、家にそっと見舞いの手紙と差し入れを置いてくれた方もいて胸が熱くなった。夫は今も続く疼痛と麻痺に心が挫けそうになることもあるけれど、何かと気遣って声を掛けてくれる友人たちに私も一緒に支えられて、時に泣き時に笑いながら、介護はする方もされる方も苦勞だけれどそれよりも大事なことを毎日教えられている気がする。

ある日娘から、小学3年生の孫が学校の音楽会で歌っている様子を撮った動画が送られてきた。同学年の子供達に混じって「虹」という童謡に振りをつけて歌っている。

『庭のシャベルが1日濡れて／雨があがってくしゃみをひとつ／雲が流れて光がさして／見上げてみればラララ虹が虹が空にかかって／きみのきみの気分も晴れて／キットあしたはいい天気／きっとあしたはいい天気』



八ヶ岳ふるさと倶楽部 「ともしび会」のご紹介

我々八ヶ岳ふるさと倶楽部の「ともしび会」は2002年に始まりました。当時主導したのは団塊の世代より少し先輩の方々が多く、世の中は音楽があふれる時代でした(私だけかな?)。当時コンサートなどは高価でしたが、「良い音楽を安く」の「音協」や「労音」などが提唱する職場合唱団や軽音楽団が多くの若者を引き付け、イベントを含め音楽を楽しむ風潮が出来つつありました。只、この頃の音楽団体の内の幾つかは総評と関連が深く左派政党の拠点とみなされましたが「ともしび会」は天真爛漫です。

一方、1954年に誕生した新宿の「歌声喫茶:灯」のステージリーダーと一緒に歌う歌声は夢と希望を載せて響き、戦後復興の波に乗り東京を中心に同様の店を増やしていました。「ともしび会」の名前は、この「灯」から頂いたものです(たぶん)。

又、音楽を医療・福祉・教育などに積極的に活用する音楽療法は特にアメリカ・ヨーロッパでは長い歴史があり、日本においても「ともしび会」発足の1年前、日本音楽療法学会が新設され、多くの事例がマスコミを賑わしていました。

このような時代に生まれた「ともしび会」は倶楽部発足以来季節ごとに開催され、コロナ禍の休止を挟みながら少人数・短時間で再開し、今後も親睦に寄与すると信じています。

(世話人 ……)



八ヶ岳ふるさと倶楽部ホームページ

<http://8furusato.hiho.jp>

✉ member@8furusato.hiho.jp

行事申し込や会報はパスワード無しでご利用いただけます

